

地域コミュニティにおける LINE活用事例集

LINEヤフー



まちの未来は
ひとりひとりのつながりから生まれる。

世代も距離も越えて、
気持ちと情報が届くまちに。

みんなで支え合い、
みんなで楽しみ、
みんなで作る。

デジタルの力で
この地域を、もっと、よりよく。

この事例集では
「つながるコミュニティ」の
LINE活用事例をご紹介します。

LINE公式アカウントを活用した事例



西味鏡学区連合協議会

愛知県名古屋市北区

約1,800世帯

HP×LINEの相乗効果でHPアクセス数が月10件から100件超に。町内会未加入者からのイベント参加相談や若者の活動参加など、新たな地域のつながりが生まれる。

背景

約1800世帯を抱える西味鏡学区では、保護者の多忙や少子化による子ども会の縮小が深刻化。紙の回覧板は回覧に時間がかかり、イベントの募集タイミングを逃してしまったという声もあった。さらに自治会との接点がない若い世帯が増える中、区の補助金を活かしてLINE公式アカウントを導入し、地域活動の再活性化を図っている。

主な取り組み

✓ LINE公式アカウントによる情報発信と登録促進

毎月の定例会で話し合われた事、ごみ収集日やイベント告知、回覧板情報など、地域情報を月2-3回配信。HPアクセス数はLINE公式アカウントからのメッセージ配信開始後に10件程度から100件超に。QRコード付きポケットティッシュの配布や市指定ごみ袋のプレゼントなど、具体的な施策で登録を促進。

✓ これからの地域を担う子どもや若い世帯、未加入者とのつながりを作る

LINE活用により、これまで口コミや紙ベースのため、加入者の周辺で完結していた情報が未加入者でも入手可能となり、未加入者からの行事参加相談や、選挙ボランティアへの学生参加など、これまで地域活動との接点が限られていた層とのつながりが広がっている。

活動への想い

- ・未加入者にも公平に地域の情報が届くことが大切
- ・子どもたちが地域に愛着を持てる機会を増やし、将来的に若い世代が地域の担い手になる循環を目指す。



上志段味自治会

愛知県名古屋市守山区

約2,300世帯

LINEの友だち追加数1900人超、おゆずり会イベント参加300人。子育て世代から自治会長が誕生するなど、持続可能な地域運営の基盤を構築中。

Public

背景

14の地域自治会と1つのエリアで構成される当地域には、高齢者から若い子育て世帯まで幅広い世代が暮らしている。従来の運営方式では活動内容の紹介もできず、転入する若い子育て世代に対応できる体制ではないことが課題であった。特に、情報発信手段の不足により、自治会活動の認知度向上が困難な状況であった。

主な取り組み

✓ 紙の回覧板でデジタルスキルを持つ地域人材を募集

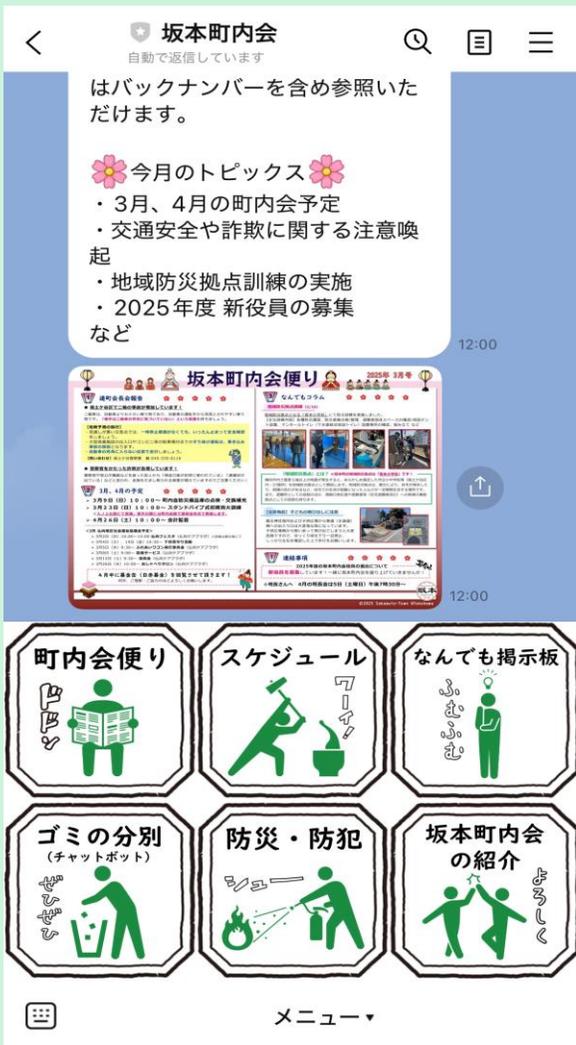
スキルを持つ地域人材を募集し、IT推進チームを結成。普及率の高さから情報発信ツールとしてLINE公式アカウントを選定し、WEB回覧板、イベント告知、防災情報など、多様な情報を一元的に発信。従来の回覧板に加え、新たな情報伝達経路を確立した。

✓ 「できるときに、できることを。」をモットーにゆるーくサポート

地域活動に気軽に関われる「ゆるさぽ」をLINEで展開。スマホ教室の開催でLINE公式アカウントの追加等、高齢者のデジタル参画を支援しつつ、従来の紙媒体も活用した多層的な情報共有を実践。おゆずり会などの新規イベントで、若い世代の参加機会も創出。

活動への想い

- ・ お金と手間は意外とかかるが、効果はそれ以上。
- ・ 若い世代を巻き込んで、活動に関わる人をできるだけ多くしていくことが重要



坂本町内会

神奈川県横浜市保土ヶ谷区

約900世帯

「すぐに・手軽に・確実に」の3つのコンセプトでLINE活用を展開。「お父さん世代」にも「若い世代」にも情報を届けたい。回覧板では情報が届きにくかった働く現役層への情報伝達を強化。

背景

コロナ禍により地域活動が全面停止し、町内会への関心低下や役員数減少という課題に直面。限られた人員での効率的な運営体制構築が急務となった。特に、**日中不在の働く世代（特に男性）には従来の回覧板では情報が届かず**、即時性のある情報伝達手段としてLINEを導入。

主な取り組み

✓ 利用者目線で選んだ情報伝達ツール

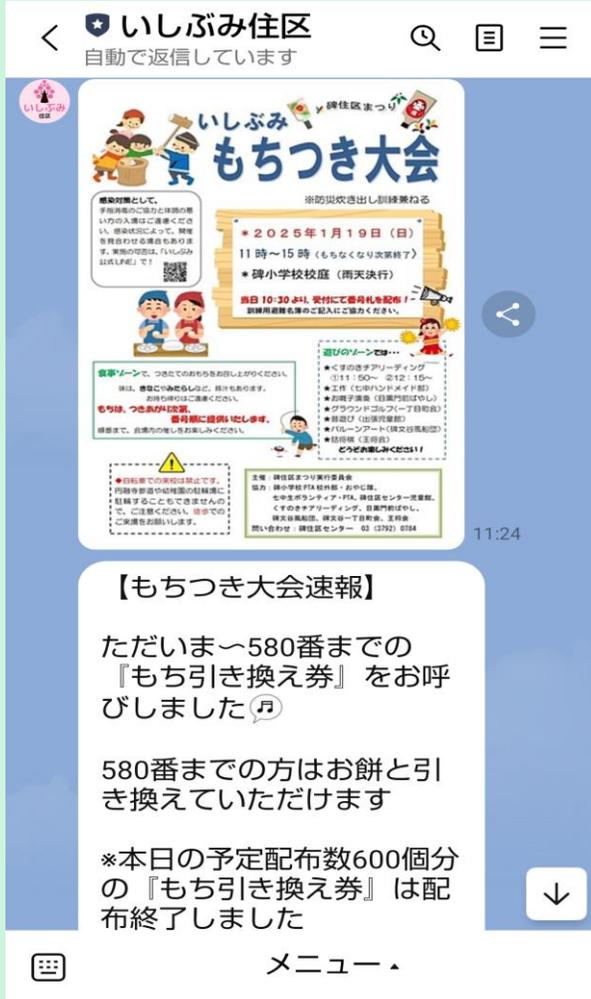
「すぐに伝達できる」「手軽に利用・運用できる」「幅広い世代に確実に届く」の3要件を満たすツールとしてLINE公式アカウントを採用。**本格導入前に1年間の実証期間**を設け、組織内での運用イメージの共有と運用負担の検証を行い、段階的に展開した。

✓ 継続利用を促す工夫と多様な周知活動

月1~2回の適度な配信頻度で情報過多による離脱を防止。町内会便りやポスターへのQRコード掲載など複数の周知手段を活用。**イベント動画配信**や友だち限定の特典配布など、**住民が継続的に利用したくなる工夫**を実施。地道な活動の結果、2年間で約340名が登録し、幅広い世代の利用実現につながっている。

活動への想い

- ・ 親世代の地域活動参加が、子どもたちに地域への愛着を育み、将来の担い手を生み出す
- ・ 時代の変化に合わせたデジタル活用で、より多くの住民が参加できる進化する町内会を目指す



碑住区住民会議

東京都目黒区碑住区（碑小学校区）

約4,000世帯

登録者数は約640人、6割以上が30～40代。シニア世代も登録。デジタル化が進むことで、運営側の活動周知や協力依頼の労力が減少。住区住民会議のコミュニケーションツールとして情報共有の幅も広がる。

背景

2019年、熊本地震や大雨災害を機に「碑住区エリア避難所運営協議会」が発足。感染症拡大を機に非接触の情報共有手段の確保が検討された。協議会メンバーのリサーチにより、LINEは幅広い年齢層の住民が既に利用しており、新たにアプリをインストールする必要がない点で最適と判明。無料プランから導入し、後に有償プランへ移行。当初は避難所運営のみの活用を想定していたが、現在は住区住民会議の様々なイベントでも幅広く活用している。

主な取り組み

✓ LINE公式アカウントによる情報発信

餅つき大会では整理券を配布し、現地のアナウンスと連動してLINEでも呼び出しをかけることで、待機列の解消を実現。また、ヒーリングヨガ教室では、前日に開催リマインドを行うとともに、講師の体調不良等による中止連絡も迅速に行い、参加者への緊急連絡体制を確立している。

✓ 施設利用促進と若い世帯とのつながり創出

会議室の空き状況を週単位でLINEで配信し、学習室の開放スケジュールを定期的に案内。LINE配信開始後、利用者が1日1～2人程度から最大10人程度に増加し、月間利用者数が40-50人に。最新の情報を継続的に配信することで、活動の認知度が向上し、特に子育て世代を中心とした若い世代の参加者の増加につながっている。

活動への想い

- 人手不足の中でもLINEを活用し効率的に地域活動を継続したい。
- 若い世代の地域参加を促進し、コミュニティへの関心を高めたい。
- 高齢者も含めたデジタル活用の促進を検討。災害時の迅速な情報共有手段として確立を目指す。



旗ヶ崎二区自治会

米子市住吉地区

約360世帯

全国共通の自治会課題「担い手不足」「参加率低下」「高齢化」を一挙解決。事業部廃止という大胆な組織改革とLINE活用で、役員0人から高校生役員誕生まで2年で実現。「義務」を「選択」に変えた先進モデル。

背景

「ずっと成り手がなくて、何年も同じ人が耐えながら続けてきた」状態から、ついに役員候補が0人となり、解散の危機に。「役員は負担が大きくて、できない」という声が大半を占め、義務的な役目が重荷となっていた。「誰もが負担なく、楽しく参加できる自治会」を目指し、事業部廃止とデジタル化による透明性向上に取り組んだ。

主な取り組み

✓ 「旗二だより」が生む参加の連鎖

毎月配信の「旗二だより」は、行事の様子や協力者への感謝を楽しく伝える内容に刷新し、LINE公式アカウントから配信。「毎月の楽しみ」と語るファンも生まれ「スマホは一生持たない」と言っていた女性が「旗二だよりが楽しくて」スマホデビュー。約350世帯中、約8割がLINEに登録しており、読者から「楽しそう」「私も協力したい」の声が続出。

✓ 「手伝って」が生むうれしさの循環

事業部廃止により、役職の壁を越えた協力が可能に。「手伝って」の一言に「必要とされてうれしい」と応える関係性が構築。納涼祭40名→200名、とんどさん20名→200名と参加者激増。温かい飲み物を振る舞う有志、餅つきの道具を持ち寄る住民。強制なき助け合いが自然に進む仕組みができた。

活動への想い

- ・ 「楽しくなければ、旗二じゃない」を合言葉に、できる人が、できる時に、できることを。
- ・ 「地域に必要とされるとうれしい」「手伝うと喜んでもらえることがとてもうれしい」の声が原動力

先進事例から学ぶ解決のヒント

先進事例から学ぶ解決のヒント（アプリ選択編）

導入アプリとして
なぜLINEを選択したのでしょうか。



横浜市坂本町内会

LINEは「幅広い年代で浸透率・普及率が高く」「**新たなアプリの導入が不要**」です。デジタル化導入にあたり、役員不足の中で効率的に運営したいことから「**すぐに**」、誰もが無理なく使えることを目指して「**手軽に**」、全ての世帯に情報を届けたいという思いから「**確実に**」という3つの要件を設定したところ、この**3つの要素を満たすのはLINE**だけだったのでLINEを採用しました。

名古屋市西味鏡学区連合協議会

持続可能な地域活動をしていくためには、**これからの地域を支える若い世帯**や、自治会に**未加入の人たちと接点をどうつくるかが大切**だと考え、多くの方が普段使っているLINEを活用することが有効であると考えました。



ここが
ポイント！

- ・ デジタルツールの導入目的を明確に。
- ・ 新しいことを始めるなら、普及率の高いツールから。

先進事例から学ぶ解決のヒント（負担編）

紙とデジタルで2重の運用になるので負担増ではないでしょうか？



横浜市坂本町内会

紙とデジタルとで**作業は増えました**。ただし**LINEの運用作業自体は大した負担ではない**です。飽きさせないように、何を発信するかを考えるのに時間がかかっています。どのくらいの負担になるか**小さく始めて検証**しました。

名古屋市西味鏡学区連合協議会

どちらにも対応する必要があるので、作業負担は少し増えたかもしれませんが、分担して作業を実施することで負担を減らしています。また、以前は**天候によるイベントの開催判断**を、参加者が現地に来て確認されていましたが、LINEで中止や決行の案内を**当日に連絡**することができるようになる等、緊急時や災害時の連絡手段としても活用することで、**配信を受け取る側の負担が下がる**こともあると思います。



 **ここがポイント！**

- ・ どの程度の負担増になるか、小さく検証をして把握を。
- ・ 配信作業負担のみに焦点を当てず、「配信を受け取る側の負担減」や「緊急時連携の負担減」についても考慮する。

先進事例から学ぶ解決のヒント（予算編）

デジタル活用に回す予算がありません。費用をどのように工面したのでしょうか？



名古屋市西味鏡学区連合協議会

自治会のデジタル活用に**補助金**を出してくれる市の制度（名古屋市電子回覧板モデル事業）を活用しました。

某自治会

つける**予算の優先度を役員間で再考**しました。デジタルツールの導入・活用は今後の自治会活動において最重要な手段と位置づけ、優先的に予算をつけました。



 ここがポイント！

- ・ 地域交流の活性化、災害時の迅速な連絡などデジタル化による効果と、かかる費用を天秤にかける。
- ・ 自治体の補助金活用を検討してみる。（補助の有無は自治体によります）

先進事例から学ぶ解決のヒント（組織合意編）

デジタルツール導入にあたり、組織内でどのように合意をとったのでしょうか？



某自治会

「今までやり方のままでは非常にマズいのではないか」という**共通理解が役員間で**とれていたことが大きいかと思います。

横浜市坂本町内会

私たちは本格導入前に**1年間ほど小さく実証**してみました。テスト的にツールを取り入れることで、負担を抑えながらも、役員の皆さんに**便利さを実感**してもらいました。



ここが
ポイント！

- ・このまま今までのやり方で良いのか、組織で共通認識を持つ。
- ・まずは小さく。まずは一步踏み出してみる。

先進事例から学ぶ解決のヒント（人材編）

- ・役員が変わる中、運用の体制はどうしていますか？
- ・デジタルスキルがある人材がいません。



名古屋市上志段味自治会

紙の**回覧板**で**ITに詳しい方を募集**しました。この募集を機に、当自治会でのデジタル活用が一気に進んだと思います。

某自治会

自治会の役員になることを敷居が高く感じている方が多いため、「地域活動のお助け隊」という形で参加のハードルを下げ、**気軽に活動に参加できる仲間を募集したい**と考えています。これにより、地域活動に興味を持つ方々とのつながりを広げていきたいと思っています。



ここが
ポイント！

- ・デジタルでの発信を手伝ってくれる人を募集してみる。
- ・ゆるく気軽に参加できる方法を考える。

先進事例から学ぶ解決のヒント（高齢者編）

うちの地区は高齢者が多く、デジタル化ができません。



米子市旗ヶ崎二区自治会

「高齢者が多いからこそ、**デジタルは『選択肢の一つ』として導入**しました。紙の回覧板も残しつつ、LINEでも同じ内容を配信。**強制せず、メリットを感じた人から始め**、結果的に8割の方が自らLINEの登録へ至りました。地域の若者によるスマホ相談会も行い、デジタルを活用する方が増えてきています。きっかけは人それぞれ。ある70代女性は『旗二だよりの写真が見たくて』スマホデビュー。**高齢者だからできないのではなく、やりたいと思える理由があるかどうか**です。」



 ここがポイント！

- ・ デジタル導入は“強制”ではなく“自然な選択肢”として提示
- ・ メリットや楽しみがあれば、年齢関係なく、高齢者も自然にスマホやLINEにチャレンジ。

先進事例から学ぶ解決のヒント（マインド編）

デジタルを導入して、最も嬉しかった変化は何ですか？



米子市旗ヶ崎二区自治会

「一番嬉しかったのは、『**楽しそう**』と言って**参加する人が増えた**ことです。以前は紙の回覧板で2週間かけて情報が回っていたので、行事の楽しさが伝わる前に次の行事になってしまう。でも**LINEで動画や写真をすぐ共有できる**ようになって、『あの動画見て楽しそうだったから今度は参加したい』という声が続々と。毎月の旗二だよりで協力者への感謝も伝えられるようになり、『自分も手伝いたい』という好循環が生まれました。**デジタルは手段に過ぎませんが、楽しさを伝える最高のツール**だと実感しています。」



 ここがポイント！

- ・ 楽しさが伝われば、人は自然に集まる。
- ・ デジタルは手段。目的は「つながり」を生むこと。
- ・ 2週間後の報告書より、今日の笑顔の写真1枚。

LINEヤフー